

# 椰子の樹

長野県ニューギニア会 会報

第8号

平成23年1月20日発行

長野市北長池1491

発行人 稲垣一良  
印刷 神林印刷

## 年のはじめに

会長 稲垣一良

明けましておめでとうございます。  
旧年中は、長野県ニューギニア会に  
対しまして、ご支援・ご協力を頂きま  
ことに有難うございました。厚く御礼  
を申し上げます。

本年も、2月の総会、7月の戦没者  
慰霊大祭、9月上旬頃に予定の現地慰  
霊巡拝など皆様のご協力により実現し、  
成功させたいと願っております。

特に現地慰霊巡拝は、年々参加者が  
少なくなり、昨年も団体扱いぎりぎり  
の10名の参加でした。

ニューギニア航空も週2便となり、  
昨年は初めて3泊5日の日程で計画、  
ウエワク慰霊の森(平和公園)、コイキ  
ンマリツク観音様と、セピック河カン  
パランバを中心に訪問しましたが、参  
加者の皆様にご好評を頂きました。参  
加者のご希望もあり、今後についても

日程をいろいろ検討して参ります。

昭和52年の第1回から昨年の第33回  
までの慰霊巡拝には、延べ764名の  
戦友・ご遺族などの皆様が現地法要に  
参加されて全員無事帰国されています。  
今年も実現できますよう皆様のご協力  
をお願い申し上げます。

松本護国神社『嗚呼戦友の碑』の整  
備縮小については、役員会で検討いた  
しておりますが、まだ結論がでるまで  
には至っておりません。ご理解くださ  
るようお願いいたします。

年頭にあたり会員各位のご健康とご  
多幸をお祈り申し上げ、ご挨拶といた  
します。



## 第42回ニューギニア方面 戦没者慰霊大祭開催

昨年も7月最後の日曜日25日に第42  
回ニューギニア方面戦没者慰霊大祭が  
松本市の護国神社で行われました。会  
員の高齢化が進み、出かけたが身体  
が思うに任せないという方が増えてい  
る中で、来賓各位と会員・遺族合わせ  
て150名余りが参加されました。参加者  
には、長野県内ほか、東京、埼玉、山  
梨はじめ遠く大阪、岡山からの会員・  
遺族が含まれます。

毎年、参加の皆さんは、10時前後か  
ら続々と参集し、会場係を勤める有志  
会員のお茶の接待で11時頃には昼食を  
取ります。1年ぶりに再会した仲間と  
の歓談のひとつともなります。

今回はこの時間に、厚労省委託の西  
部ニューギニア戦没者遺骨情報収集派  
遣団に参加した荒井緩会員から体験談  
が話されました。

定刻の12時慰霊祭が始まり、神官主  
宰の祭式が厳かに行われました。祭式  
の途中、稲垣一良会長より祭文が、菅  
谷松本市長(代理)より慰霊の言葉が読  
まれ、さらに来賓挨拶に続いて電報が  
披露されて祭式が終わりました。

そのあと大日方辰夫さんから昨年の  
第32回東部ニューギニア慰霊巡拝の報  
告がなされ、さらに今年の第33回東部  
ニューギニア慰霊巡拝の結団式が行わ  
れました。宮原千代治さんの遺族代表  
挨拶に続き、最後に一同で唱歌『ふる  
さと』を歌って閉式となりました。

## 今年の現地慰霊巡拝

長野県ニューギニア会では、毎年、  
慰霊巡拝団を結成して現地での法要を  
行っています。本年の計画についてご  
案内いたしますので、皆様方のお申し  
込みをお待ち申し上げます。

### ◎方面と訪問予定地

・東部ニューギニア方面

ポートモレスビー・ウエワク・マダ  
ン・ラバウル ほか

◎西部ニューギニア方面

ポートモレスビー・ジャヤプラ・サ  
ルミ・ゲニモ ほか

### ◎実施期間

東部・西部とも、9月上旬実施

7日間の日程を予定しています。

### ◎参加費用概算

・東部 約33万円 成田発着

・西部 約42万円 成田発着

### ◎注記

・東部・西部の両コースとも、詳細に  
つきましては関係方面と打ち合わせ  
中です。

・現地の情報についてご連絡をいたし  
たいので、参加ご希望の方はあらか  
じめ左記までお申し出ください。

・訪問地やご希望などございましたら  
お寄せください。実現するよう交渉  
をしてゆきます。

・催行最少人員 各コースとも8名

### ◎連絡・申込先

・渉外担当 原雅彦

090-1426-3907

第33回

慰霊巡拝概要報告

団長 本田 昌彦

今回の慰霊巡拝はニューギニア航空の成田便が、従来の土曜日発に加えて水曜日発が増便されたため、初めて3泊5日の短日程で行なわれた。

慰霊団は、県内から7人、北海道、東京、埼玉から各1人ずつの10人、添乗員とも11人の小規模の団体だった。旅程は別表によるが、それぞれの場所での感想は同行団員各位のレポートによることとして、私はお世話と取り纏め役としての報告に止めることとした。なお、詳細についてはホームページにも掲載の予定があるのでご一読下さればと思っている。

飛行機はポートモレスビーに早朝到着、朝食のあと午後の便までの時間を市内観光に出掛けた。予定時刻に空港へ戻ったところ機体のトラブルのため待つこと3時間余り、結局ウエワク便はキャンセルとなり、急遽市内に宿泊することとなった。初日からとんだハプニングであった。

翌日(3日)は早朝ポートモレスビーを出発、8時にはウエワク到着、以後予定の行動となる。各所での慰霊式ではそれぞれの遺族代表が切々と慰霊の言葉を述べられ所期の目的が果たされた。4日日は学校訪問とセピック川、水上の村カンバラバを訪ねた。最終日は早朝ウエワク出発ポートモレスビーに戻り午後の便で成田へ、慌ただしい一日を終え全員無事帰国した。

今回は、初めての短期間の旅程による慰霊巡拝で、当初から予想されたとおりこの日程での行動は当然限定され余裕が無い。また、スケジュール通りに実行できないことが発生しやすい現地において、事後の対策や旅程の修正などの問題に対しても、事前によく考えておかなければならないだろう。

反面、8日間では長くて参加できない方にとつては『短期間でニューギニアの一端でも見聞できれば良い』との見方もある。

いずれにしても、次回以降の日程計画については、できるだけ多くの方々に参加して頂けるような魅力的なプランを作成することが必要と思われる。

第33回 東部ニューギニア慰霊巡拝旅程				
①	9/4 (土)	成田集合 出発	機中泊	
②	/5 (日)	ポートモレスビー到着 市内観光 ウエワク便欠航 ポートモレスビー泊		
③	/6 (月)	ポートモレスビー→ウエワク ウエワク 慰霊の森平和公園慰霊式 コイキン 観音像前慰霊式 コイキン 墓碑前慰霊式 洋展台 高射砲陣地跡	ウエワク泊	
④	/7 (火)	セント・ピーター校訪問 セピック観光 カンバラバ村	ウエワク泊	
⑤	/8 (水)	ウエワク→ポートモレスビー 市内観光 ポートモレスビー→成田 成田帰着 解散		

ニューギニア慰霊旅行に参加して

小林信や(長野市)

この旅に参加するきっかけは原さんの熱心な勧誘によるものでした。

昨年、計画していたのですが医療機関は新型インフルエンザに翻弄され、海外渡航は自粛となり断念。そして、今回ようやく実現いたしました。

私がこの旅に惹かれた理由の第一は慰霊巡行であることでした。戦争があった場所を訪れ、二度と戦争を起こさせないという自分の信念を確かめたいと思っていたからです。もう一つはあちらの方が慰霊塔等を管理してくれていることなど、現地との交流の可能性があることでした。

旅を通じて、会員の皆様は遺族でない私たち(同じ国立病院機構災害医療センターの原口先生も参加)を気持ちよく受け入れてくださいました。それぞれの戦死された肉親のお話をしてくださいました。ウエワク慰霊墓苑での西条さん、コイキンでの浅沼さんの弔辞など心に沁みいるものでした。富田さん親子ともいい出合いを戴きました。たった5日間ではありましたがとても濃密な交流ができました。それらは慰霊巡行というしっかりした目的意識がある旅だからだったと思います。そして皆さんが戦争を美化せず、理性的に捉えていることにも爽やかさを感じました。

南国異郷の自然も満喫できました。広すぎてどっちの方向に流れているのかわからないセピック川の舟旅では、

カフエ・オレ色をした水面を吹く心地よい風を味わいました。その帰り道、峠から眺めたナイフのような鋭く切れ込んだ黒い葉陰で縁取られた夕日に輝く海が心に刻まれています。

ささいなことでも私が気づいたことが一つあります。豊かな日本では、枯れた街路樹は欠けたままのことが多いのに、貧国のこの国では欠けた街路樹の所に、ちゃんと幼木が植えられています。これはどんな国民性の違いによるのかという疑問が残りました。

この旅へ参加したことにより、自分の中に今までにない風景の窓が増えたことを実感し、それぞれの皆さまに感謝申し上げます。有難うございました。

注・小林さんは「国立病院機構東長野病院」の院長先生です。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

戦没者慰霊巡拝

浅沼紀幸(須坂市)

9月4日夜、成田空港を離陸したとき、心に秘めていた父に会えると思うと何か胸が熱くなっていた。そして、母が叶えられなかったニューギニアへの巡拝を夫婦で行くことができ、仏への供養ができることを、協力し支援してくれた妻や子供達にそつと感謝した。父は3度目の出征の際、遠い韓国から両親と母の親、そして、母に手紙を書いている。涙ながらに書いたと思われる乱れた字体から『生きては帰れない』ことを予感していたことがうかがわれた。いつどのような状態になって

も妻子のことを心配してくれた父、そして、父亡き後は私たち二人の子供のために独り身で一生を終えた母、この両親に対しては感謝してもしきれものではない。

ポートモレスビーの丘から眺めた海は美しいエメラルドグリーン、の穏やかな表情だった。こんな静かなところで戦いがあつたとは信じられなかった。

翌日、ウエワクの平和公園慰霊の森で最初の慰霊式典を行なった。前途ある青年たちがひたすら国の為に散つていったと思うと怒りと無常を覚えた。日本が今日こうして繁栄と平和を享受できるのも尊い命の犠牲の上にあることを再認識し、「安らかに眠りください」と合掌した。

コイキン観音では、先々を悲観した多くの若者がこの崖から身を投げたとの団長の話を聞き身につまされる。

最後の巡拝地ボイキンは父が戦死した地である。やっと父に会えると思うと胸が高鳴った。私は子供の頃から父はどんな場所で戦って死んだのかとずうっと思い続けてきた。こうして、ボイキンの地に、父に会いに来られたなんて夢のようだった。団長の説明では「ここでは戦闘は無かった。恐らく飢えとマラリヤによるものではなからうか」とのこと、父はさぞ無念であつたろうと思つた。「日本軍は強いんだ」と信じて戦地に赴き、食料も弾薬もなく唯々ジャングルの中を逃げ惑い死んでいったと思うと、なんと残酷なことかと無念でならない。



小石を何個か拾って帰った。これは、母の墓に供えたいと思つてゐる。

団長はじめ一緒に来た皆様にはたいへんお世話になりました。

有難うございました。

## ニューギニアの伯父さん

西条政美(小川村)

### ◆伯父との出会い

私が生まれたとき既にこの世にはいなかった伯父。その存在を意識し始め

たのは『戦争』を学び始めてからのことだけれど、長野県ニューギニア会に入つてニューギニア戦を聞きおもしろい、私にとって伯父は本当に遠い存在だった。

今回、還暦を過ぎた私が、25歳の青年だった伯父に会うためニューギニア(PNG)に行く機会を得られた。従来1週間の旅が5日間コースの短日程で募集されたからである。

伯父が命を落としたとされるサルミはインドネシア領のため行けなかったけれど、PNGの地を自分の五感で見聞できた。それだけで伯父との距離が縮まり、いや、伯父がいたことを確信できたようにも思う。

### ◆南の島・そして戦跡

椰子の木が繁り、色とりどりの花が咲き、豊かに木の実が採れるPNGは私たちのイメージする「南国」そのものだった。時の流れもゆったりとしている風景を見ていると60数年前ここで戦争が行なわれ、何十万もの人々が死傷したとは想像できない。

平和公園、コイキン、ボイキンなど慰霊で回る。平和公園の慰霊碑を囲む鉄柵に心が揺らぎ、コイキンの観音さまに気持ちが安らぎ、そして、ボイキンの傷んではいても原型を止めて置かれている鉄兜や水筒に泣きたくなった。「ジャングルが全てを片付け

てくれる…」とマッカーサー將軍は言つたそうだが、現存する戦跡の遺品を見ていると悲しいけれど…どうしたらいいのだろう。

### ◆PNGに寄り添つて

短時間だったけれど学校を訪問し、キラキラ輝く大きな瞳に出会うことができた。校舎も教材も不十分な環境の中で学ぶ彼らが(学校に通える子どもたちはまだまだ幸せなのだそう)、この国の将来を背負つて行く。あの子たちの瞳が光を失わないよう支援をしていくことが、私たち、いや私の責務の一つだと思う。かつて、自然を相手に生きてきたPNGの人々を、戦争の舞台に引っぱり出した責任は私たちにもあるだろう。

戦跡も風景も人々もみんなひたひたまで、のめり込みそうなニューギニア。静かに眠つて…、伯父さん。さようなら。

参加者(順不同 敬称略)

浅沼 紀幸 須坂市

〃 糸い子 〃

小林 信や 長野市

原口 義座 立川市

本田 昌彦 青木村

〃 祥子 〃

大日方辰夫 小川村

西条 政美 〃

富田 英二 小樽市

〃 ふみ江 富士見市

浜田 勝 添乗員

夏の慰霊祭のときには、小さな体でできばきとお世話をされ、また、冬の總會にもいつもご出席、皆さんご存じの宮内ナツさんの姿を見ると、これほどまでにニューギニアに打ち込んでいらっしゃる方もいないのではないかと思います。ナツさんに、その思い、さらに、明治・大正・昭和・平成と激動の永い年月を、女手一つで生き抜いてきたお話をお聞きしたいと、暑い夏を予兆させる昨年5月、松本市沢村のお宅を訪問しお嫁さんを交えてお話を伺いました。

(竹村・大久保)

#### ☆初めてのニューギニア

ナツさんのニューギニアへの慰霊の旅は、昭和52年(1977 34年前)に行なわれた長野県ニューギニア会の第1回慰霊巡拝団に参加したのが最初でした。

「その頃は、まず鹿児島島に行き、鹿児島空港から、香港、マニラなどを経由して飛んで行くので、途中で泊まることになってしまい、時間もお金も今より大分掛かる旅行でした。主人が戦死して、1年後に公報がきましたが、主人の『死』ということが頭のなかで整理ができないで、初めてニューギニアに行くときは慰霊の旅ではなくて、『あの人は生きています。探しにいつて連れ戻す：』の思いでした。」

「でも、いざ現地に着いてみると、あまりにも日本と違う環境の厳しさを見たり、同行者の説明を聞いたりしているうちに、半分は納得できましたけど、まだ心の中には『主人は生きています』の思いがつのつてきて『私は一人で残って主人を探す：』と、駄々をこねてみんなを困らせました。今になれば恥ずかしさと懐かしさが重なります。」「このときは、主人が戦死したときとされるハンサ方面へ、小さな飛行機で5人ほどで行きましたが、いま思うとど

うも本当のハンサではなかったような気がします。それでも慰霊祭をしていると、現地の人に来て『夕焼け小焼け』や『さくらさくら』などを歌ってくれました。きつと日本の兵隊さんに教えて貰った歌だったのですね。そんなときの感激が、私を何度もニューギ



#### 乗り越えて七十年

#### 宮内 ナツ



ニアへ駆け立てた一つの原因かもしれないですね。そして、昭和55年には、コイキン・マリック観音像建立という大きな行事にも立ち合うことができたのは幸せでした。」

#### ☆それからのニューギニア

初回は思いが混乱したナツさんも、2年後の2度目の旅からは、現実を受け入れることができるようになり、同行した戦友の方々の話を基に、亡くなったご主人とその仲間たちの霊を慰めることができるようになったそうです。

その後、いままで10回現地を訪れて

いるナツさん、当初は昭和58年の第7回慰霊巡拝を、ご主人の『七回忌』と自分自身で位置付けて、これを最後にしようと思ったそうですが、しかし、「時期がきて、また巡拝の話が耳に入ると何かと理由をつけて参加してしまふんですね」とナツさんは恥ずかしそうに笑いました。

現地へ旅立つ日本の空港も、鹿児島・羽田・成田・関西空港、と増えてゆき、成田では「成田山新勝寺」へ出発前の参拝をしたり、上野駅から京成電車への乗り継ぎで、重い荷物をゴロゴロ引つ張って駆け足させられたり、

羽田へのモノレールが途中で止まってしまいひやひやしたり、何かと大変なでも懐かしい思い出そうです。

「昭和62年、第11回巡拝は孫の浩司を連れての参加でした。平成元年の第13回巡拝は歳も78歳になっていましたが、なんと『十三回忌』の節目を全うしたので老体にムチ打つての参加になりました。」

「現地では、山に向かい、海に向かって声を限りに、夫の名を、親の、兄弟の名前をみんなで呼び掛けたこと。ひもじい思いで苦しんだ兵隊さんたちと、白米のおにぎりをホテルで作って

お供えしたことなどもありました。今となれば、あれもこれもよい思い出でした。」

#### ☆結婚・夫の戦死・そして戦災

ニューギニアへの旅の思い出話に続いてナツさん、実は長野県ニューギニア会との縁は、それこそ、偶然の連続だったことを話しました。

ナツさんは明治44年(1911)7月5日茨城県笠間の生まれ、東京の下町で髪結いの年季奉公が明けたときに、千葉県佐原出身で東京で働いていたご主人と結婚、向島に所帯を持ちました。やがて長男が誕生。そして、昭和16年3月ご主人に召集令状、北支の方に派遣されました。ナツさんが2番目の子供を身籠もっているときでした。その後、ご主人は北支から南方に送られました。ニューギニア派遣です。

便りもままならないナツさんのところに、昭和19年の秋に突然ご主人の戦死の知らせ、『昭和18年10月10日ニューギニア島ハンサで戦死』とだけ書かれていたそうです。

昭和20年3月10日夜、東京大空襲、下町はB29の無差別爆撃で焼き尽くされました。ナツさん親子も猛火に追われながらも、なんとか命だけは助かって荒川の橋の下に逃げこみました。そこには同じように家を焼かれた10家族ほどが身を寄せあっていました。貰った野菜を汚れた川の水で洗って飢えをしのぎました。笠間の実家にも行ってみましたが、そこも、疎開してきた親戚の人たちが住み込んでいて、ナツさんたちの居場所はありません。

## ★母子寮へ

住むところに困り果てて母子寮の入居を申し込んだところ、運よく60人中から、なんと2人だけの当選者の中に入りました。ようやく手に入れた切符で子供たちを連れて松本の母子寮の生活が始まりました。「着のみのまま、まるで乞食のようだったよ、寮母さんが七輪を一つくれたっけ」とナツさんは覚えています。

一応、住むところだけはできたものの、何もないので仕事探しにナツさんは歩き回りました。幸い養鶏場で卵詰めの仕事があり雇ってもらいました。ところが、半年ほどたった頃母子寮で赤痢が流行、娘さんが「健康保菌者」として入院するはめになり、結局、家族が保菌者というので養鶏場の仕事も辞めさせられてしまいました。

この母子寮に、ご主人の遺骨が配達されてきましたが、中には、名前の書いた紙のほかには何もありませんでした。

## ★仕事を見つけて

生活は苦しい。「なんとしても仕事を探さなければ子供たちを育てていけない」と必死で頼み歩くうちに、たまたま、市立病院が医専と一緒になっていて、そこに雑役婦（今の用務員）として日当1円20銭で採用され、働く場所が医専の法医学教室、昭和21年のことでした。

その職場も、松本医専↓松本医科大学↓信州大学医学部と三度名前が変わりましたが、勤勉で丁寧な仕事ぶりはいづかみんあの厚い信用を得て、貴重

な存在となっていたナツさんでした。

「私の血液が良いというので毎日サンプル用に5ccくらい採られていました。唾液も欲しいと言っては、梅干しを見せられてツバも出していました」と、ナツさんは笑います。

解剖の助手のように遺体と向き合うこともありました、どんな仕事でも暮らせるようになったことだけで有り難かったナツさんでした。

「遺体と向き合うことを続けられたのは、心のなかに、主人が亡くなったことも影響していたのかも知れないなあ」とナツさんは小さな声でつぶやきました。

このような仕事を昭和21年から64年まで、教室での貴重な存在として40数年勤めあげ、お子さんを立派に育て上げたのです。

## ★偶然の続いたことが：

「考えてみると、主人が早く逝ってしまい、戦災で焼け出されて住むところがなくなり母子寮に入りました。希望者が大勢いたのに良くも当選したもんです。その母子寮が、偶然、松本にあったので長野県と縁ができました。母子寮に当たらなければ、松本にすることはなかったんです。その松本で鶏卵工場に勤めたところ、たまたま、運悪く、娘が赤痢に罹って退職させられました。次の職を探して信大の用務員になった法医学教室で働くようになりしました。もし、娘が赤痢に罹らなければ、卵の包装作業でずっとそこに働いていたかも知れないし：いろいろなありました」。ナツさんは苦勞と偶然の連

続だった60数年の戦後を嘔み締めるように話してくれました。

「でもね、卵工場では、穴が開いた卵を毎日20個づつ貰えたんです。ご飯がなくても卵を食べて暮らしました」。ナツさんは強かったのです。

## ★もう一度行きたい

最後にニューギニアに行ったのは87歳のとき。10年以上前になりました。



「ここに来ると主人に会えます」  
松本護国神社で

まだ今でも「行きたいなあ」と思うときがあるそうです。

「荷物がなけりやなあ：、でも、お土産持っていくと皆が喜ぶから持つて行きたいし：、もう持てないなあ」。ナツさんは細い腕をさすりました。

亡くなったご主人がニューギニアに行つてから3回くらいしか慰問袋を送

らなかつたとのこと。出征するときに「帰ったら家を建てるから、節約して貯金しておけよ」と言われ、そのせいではないけれど、あんまり荷物を送つてやらなかつたのが心残りで、「ニューギニアに行つて気の済むまでお参りしてやらなければ」と、今でも思っているそうです。「コーヒーを送ってくれと言ってきたんだけど送れなかつた。今でもコーヒーを飲むたびに、こういうのが欲しかったんだろ

うなあ」と心が痛い：、と言うナツさんでした。

## ★そして今は：

「主人を亡くした淋しさや、生きていく為の苦勞はしたけど、それは私たち家族だけでなく、その頃は大半の人たちがそんな境遇と向き合っていました。だけど、今は、子供や孫、曾孫までいて幸せを感じています。昔の苦勞や、辛さ、悲しさ、寂しさが今の幸せを何倍にもしてくれています。有り難いことです。」

「何年かしたら、飛行機に乗らなくても空を飛んでニューギニアに主人を連れ戻しに行きますよ」と、屈託なくナツさんは笑っていました。

『白寿』のナツさん、ご主人の戦死から形見の子供たちを育てながら酷しい戦後の生活乗り越え、87歳までニューギニアへの慰霊の旅を10回も繰り返した、あの小さな細い体のどこにそんな強さがあつたのでしょうか。

「どうぞこれからもお元気で」と願うばかりでした。

## 西部ニューギニア 遺骨情報収集に参加して

厚生労働省の『海外未送還遺骨情報収集事業』に参加する機会を得ましたので、会員・遺族の皆様のご参考になることを願い、その体験をお話します。

参加したのはNPO法人太平洋戦史館に委託された西部ニューギニア方面の遺骨情報収集で、この第1回派遣団(岩淵宣輝団長)に記録担当団員として参加しました。6月29日から7月12日にかけてジャヤプラ3泊4日、ピアク6泊7日、延14日間の日程で行ってきました。ジャヤプラではアルソー、ゲニム、プアイを訪問し、ピアクでは島内6箇所ほどを廻りました。

派遣団の業務は、現地協力者たちから提供される旧日本軍戦没者の遺骨の出土情報を集め、その内容を確認し、最終的には遺骨の現物確認を行って厚生労働省に報告することです。現地協力者との対話は、英語が通じる場合以外は信頼できる通訳を介して行います。太平洋戦史館は10年ほど前から純粹なボランティアとして集めた情報を厚生労働省に提供していますが、独自業務としては『未帰還戦没者捜索活動』と意味づけて実行しています。

そのために、はじめに現地協力者に仕事の趣旨と要求をかなりの時間をかけて以下のように明確に伝えます。

「われわれは単なる人骨探しに来たのではなく、この地で戦没した兵士たちの遺体の捜索をしている。発見した

遺骨や遺品は現場から動かさずに出土した状態のままで見せること。やむを得ず持ち帰る場合は、現場写真を撮影し、現地の位置関係と出土状況を記録し、遺骨・遺品の現物写真資料と照合可能な状態で保管すること。」

次に遺骨発見情報を聞き取り記録します。一部は、すでに発掘されて保管されており、その実物を実況検分して記録します。そのあと、現場に向かい、状況を確認して記録します。同時に発見者や連絡者の情報を記録します。

今回確認した複数の現場では、目の前で発掘が行われました。遥かに海を望む山の斜面に沿って20×30メートル間隔で並び、身につけていた装具の金具・印鑑・薬ビンなどの遺品と共に埋まっている遺骨は、素人目にも当時の戦場の真只中で倒れたままの遺体であることが推測できるものでした。そこでは無言の遺体に向かって合掌してその場を離れるしかありませんでした。

現地の人々の話を聞いたり遺骨発見現場を見たりするにつけ、帰還戦友の皆さんの手記に記された当時の出来事が目の前にほうふつと浮かび上がる気がして万感胸に迫るものを感じました。

今回の見聞からもまだ極めて多くの未帰還兵士の遺体が放置されていることが確信され、単なる『遺骨収集』ではなく、出土記録と誠心誠意の身元確認を含む『遺体捜索』が行われなければならないことを痛感しました。

(なお、現地写真の掲載には承諾が必要なので今回は掲載できません。)

(荒井綏)

## 総会のお知らせ

第43回通常総会が左記要領で開催されますのでご案内いたします。

記

日時 平成22年2月11日(祝)

午後2時より

会場 浅間温泉ホテル井筒

多数の会員の皆様のご参加をお待ちしております。

## ご寄付ありがとうございました

昨年度中に寄付(慰霊祭玉串料等、その他一般寄付)をお寄せいただいた方々にお礼申し上げますとともにそのお名前を以下に掲載します。(敬称略)

鈴木 忠重	小野可南子
田中 之雄	安川 叡春
田中 隆二	松田 寿朗
近藤 裕子	水野 洋三
代田 文夫	小池 弘光
二木登美子	依田 洋吉
五月日輝雄	田辺はるよ
宮下 美保	高見沢袈裟久
矢島 敏男	両角 治郎
宮坂 廣美	

## 新入会員

昨年度中に4名の方が新しく入会されましたので、お名前を以下に掲載します。(敬称略)

諫山 正司	(福岡県太宰府市)
中野 清香	(長崎県西彼杵郡長与町)
富田 英二	(北海道小樽市)
三澤 卓夫	(岡谷市)

## 編集後記



●昨年の東部ニューギニア慰霊巡拝団の皆さん、3泊5日の忙しい日程でお疲れさまでした。初めて参加された方々から、新鮮な手記を寄せて頂き掲載いたしました。編集の都合で一部割愛させて頂きました。なお、今回は、東長野病院の小林院長先生も参加され、会報への寄稿を頂戴いたしました。今後とも当会へ何なりとご助言を頂ければ幸いです。

●人物往来として会員の宮内ナツさんを取りあげました。お国訛りの混じった2時間程の録音テープから編集。亡くなった戦死者はもちろん不幸でしたが、残された者の長かった戦後の辛酸が切々と胸を打ちました。そんな苦勞を乗り越えてお元気な百歳のナツさんに、松本の慰霊祭でお会いできることを励みといたします。

◆『椰子の樹』も今回で8号です。会員の皆さんに沢山の情報を発信し、また、皆さんからは多くの話題を提供して頂きながら、より良い会報作りに努めたいと思っています。よろしくご支援とご協力をお願いいたします。

●漢字検定協会の「今年の漢字」この10年は「戦・帰・虎・災・愛・命・偽・変・新」のあと、去年は『暑』が選ばれました。さて、今年はどんな漢字が当てはまる年になるのか。何れにしても、皆様方にとって良い一年であることをお祈り申し上げます。

(竹村・大久保)